

御衣布並びに単衣布給ひ候ひ了んぬ。

抑食は命をつぎ、衣は身をかかす。食を有情に施すものは長寿の報をまねき、人の食を奪ふものは短命の報をうく。衣を人にほどこさぬ者は世々所生に裸形の報を感ず。六道の中に人道已下は皆形裸にして生まる。天は随生衣なり。其の中の鹿等は無衣にして生まるのみならず、人の衣をぬすみしゆへに、身の皮を人にはがれて盗みし衣をつぐのうぼうをえたり。人の中にも鮮白比丘には生ぜし時、衣を被て生まれぬ。仏法の中にも裸形にして法を行ずる道なし。故に釈尊は摩訶大母比丘尼の衣を得て正覚をなり給ひき。諸の比丘には三衣をゆるされき。鈍根の比丘は衣食とゝのわざれば阿羅漢果を証せずとみへて候。殊に法華經には柔和忍辱衣と申して衣をこそ本とみへて候へ。又法華經の行者をば衣をもって覆はせ給ふと申すもねんごろなるぎなり。

日蓮は無戒の比丘、邪見の者なり。故に天これをにくませ給ひて食衣ともしき身にて候。しかりといえども法華經を口に誦し、ときどきこれをとく。譬へば大蛇の珠を含み、いらんよりせんだんを生ずるがごとし。いらんをすてせんだんまいらせ候。蛇形をかくして珠を授けたてまつる。天台大師云はく「他經は但男に記して女に記せず」等云云。法華經にあらざれば女人成仏は許されざるか。具足千万光相如来と申すは摩訶大比丘尼のことなり。此等もってをしはかり候に、女人の成仏は法華經により候べきか。要当説眞實は教主釈尊の金言、皆是眞實は多宝仏の証明、舌相至梵天は諸仏の誓状なり。日月は地に落つべしや、須弥山はくづるべしや、大海の潮は増減せざるべしや、大地は翻覆すべしや。此の御衣の功德は法華經にとかれて候。但心をもってをもひやらせ給ひ候へ。言にはのべがたし。